

株式会社Global  
ハーブ調剤薬局稲沢店  
(愛知県稲沢市)

薬局をリハビリの場と位置づけ  
日常生活全体を通して  
地域で暮らす患者を支える



患者の話をよく聞くことから  
精神科のサポートは始まる

株式会社Globalの代表取締役の大岩眞二さんは精神科病院に勤務した後、その病院に隣接する薬局に移って診療に従事し、長年にわたって精神科疾患の患者と向き合ってきたこの分野のエキスパートだ。2012年に愛知県稲沢市に開局した「ハーブ調剤薬局稲沢店」も精神科診療を主体とする北津島病院に隣接しており、同店に来局する患者の多くは何らかの精神科疾患を患っている。

その中でも多いのが統合失調症だ。また、北津島病院は児童精神科を標榜していることから、近年は注意欠陥多動性障害も増えている。一方、社会問題となっている認知症は、国を挙げた啓発活動によって早めに医療機関を受診する人が多くなり軽症者が増加している。ひとくちに精神科疾患といっても、その背景は様々だが、共通しているのは、入院患者は減少傾向にあり、地域で暮らす外来患者が増えているという点だ。

「病気のせいで患者さんの多くは社会生活を営めていません。病院の外来と自宅を往復する単調な日々の中で、患者さんにとって薬局薬剤師との関わりは、社会生活を営めるようにするためのリハビリの場でもあるのです。そのことをよく認識し、精神科の患者さんをサポートすることが大切です」と大岩さんは指摘する。そして、「いかがですか」と声かけを行い、患者の話をよく聞くようにすることからサポートは始まると示唆する。

「最初はアプローチしても反応がないことが多いですが、このような働きかけを辛抱強く行い、こちらが話すことを控えてよく聞くようにすると、やがて患者さんが他人の話聞けるよう変わってきます。つまり、興味がなくて聞き流していた薬の説明をしても耳を傾けてくれるようになるのです。そして、副作用が出たときには自分から話してくれるようになります」と大岩さんは話す。

さらに服薬指導を行う際の留意点として、大岩さんは次の点を挙げる。まず服薬状況を確認するときは「薬を飲んでいますか」とストレートに質問してはいけない。抑圧されていることが多い精神科の患者には責められているように聞こえてしま

うからだ。指示どおり服薬していることを前提に「飲めないようなことはありませんでしたか」という聞き方で、相手が服用していなかったときにその理由を言えるようにするのがポイントだ。

また、患者が訴える症状の中には身体的な問題が原因ではないことも少なくない。例えば不眠の原因一つとっても、昔のことを思い出して眠れないこともあれば、夕方に仮眠をとるために眠れないこともある。「いろいろな観点から患者さんに質問し、生活全体から原因を探っていくことが肝心です。原因によっては薬が必要ないこともあるからです」と大岩さんはアドバイスする。

そして、服薬指導はリハビリの観点から介入することも重要だ。例えば処方変更を依頼する際、大岩さんは診察の場で患者が医師に直接、変更依頼を申し出るように働きかける。診察終了後には患者に依頼できたかどうかを確認し、口頭で行えなかった場合は次回の診察でメモを渡すようにアドバイスする。患者にこのような行動をとってもらうのは、社会生活を営む際の訓練になるからだ。「何でもやってあげるのではなく、患者さんに残されている能力を引き出し、地域の中で暮らしていただけるように支えることが薬局薬剤師に与えられた役割だと思うのです。生活リハビリの視点を持って活動することで薬局薬剤師の業務はさらに広がっていきます」と大岩さんは言い切る。

よりの確な服薬指導を行うために  
疾患の特徴を押さえた対応を实践

よりの確な服薬指導を行うために知っておきたいのが疾患の特徴を押さえた対応のポイントだ。大岩さんによると、統合失調症の患者の場合、いくつもの事柄を一度に覚えることができないため、服薬指導の際は大事な要点を1つだけ伝えるようにする。「自分で考えて選択することも苦手なので、患者さんが服薬の判断を誤らないようにやるべきことをはっきりと指示しましょう」（大岩さん）。

アルコール依存症の患者の場合は、厳しく指導すると来局しなくなるので、できたことをほめるようにして服薬への意欲を高める。また、説得するのではなく相手が納得できるように説



興奮した患者が乗り越えてこないように薬の受け渡しや服薬指導を行うカウンターはやや高めにしている



家族が正しい知識を身につけることは患者の安定にもつながるため、積極的に情報を提供する



大岩眞二さん(写真右)は薬局薬剤師を対象にした講演活動にも熱心に取り組む。「精神科疾患への理解を深め、仲間を増やすことは一人でも多くの患者さんを救うことになるので、講演活動は私の大事なライフワークです」

明することも大事なポイントだ。

うつ病の患者の服薬指導には重要な時期が3つある。1つ目は薬を飲み始めるときだ。病気のせいでマイナス思考が強くなっているため、患者は薬の効果がないと思えば直ちに服薬を中止する。「3日間あるいは1週間と期限を決めて服用を継続してもらいます。その際、途中でやめないように薬がどのように効いていくのかしっかりと説明をすることが大切です。また、薬の効果がなかったときの対応について、あらかじめ患者さんに話しておくことで安心して服用を続けることができます」と大岩さんは話す。

そして、2つ目の重要な時期はうつ病がよくなってきたときだ。体調を過信した患者が薬の服用をやめてしまうこともあるので、いつまで飲み続ける必要があるのか服用期間の具体的な目安を示す。「この時期にお薬手帳を作ることも勧めます。患者さん自身が薬の記録を残すことによって再発したときの治療に役立てることができるからです」（大岩さん）。

さらに3つ目の重要な時期は、仕事に復帰するときだ。元気になったのに薬を飲んでいるのはおかしいと服用を中止する患者は多いが、復帰した途端に調子を崩すことが少なくない。復帰前の服薬指導では仕事に慣れて落ち着いてきたら薬の量を減らし、徐々にやめていくように見通しをきちんと説明する。また、大岩さんは具合が悪くなって休むときは会社に連絡を入れるなどの生活指導もあわせて行っている。「患者さんに社会のルールを教える人が意外にいないのです。特にうつ病の患者さんでは社会復帰の後押しをするようなサポートも必要です」と大岩さんはアドバイスする。

このように各疾患の特徴を押さえて対応することは精神科の患者が店頭で声を荒げるといったトラブルを避けることにもつながる。大岩さんは精神科疾患の知識を身につける方法として、様々な勉強会に参加することを勧める。

地域で患者や家族を支えるには  
病院薬剤師との連携も必須

一方、精神科の領域では家族へのサポートも不可欠だ。病気の

の性質上、誰にも相談できずに何もかも抱え込んでしまう家族が多い。そこで、大岩さんは患者に残された能力を引き出して支えるという目的を家族とも共有したうえで、患者の食事や睡眠の状態などを見直し、患者自身にやってもらうことと、家族がサポートすることを整理する。「すべて自分たちで世話をしなくてもいいということがわかるだけでも気持ちがずいぶん楽になるようです」（大岩さん）。

また、疾患の特徴を知らないことで困っている家族には対応のポイントを具体的に伝える。以前に母親からの相談を受けて発達障害児を担当する教師をサポートしたこともある。「患者さん同様、ご家族の話もよく聞いてあげることで薬局薬剤師はいろいろなことで頼ってもらえる存在になります」。

こうして地域で患者や家族を支えていくためには医療機関との緊密な連携も欠かせない。大岩さんは医師だけでなく病院薬剤師も巻き込んでいくことが必要だと指摘する。「精神科領域においても入院から在宅への流れが急速に進んでいますが、患者さんは何度かの入院退院を繰り返しながら、最終的に地域で生活できるようになります。このような状況の中、以前にも増して入院と外来の医療スタッフ、すなわち医師と病院薬剤師と薬局薬剤師の三者はシームレスな関係で継続的に患者さんに関わることが重要になってきています」（大岩さん）。

大岩さんは薬剤管理情報提供書を活用して病院スタッフに積極的に情報を届けているが、病院の薬局を通じて情報提供を行うと病院薬剤師とも確実に外来患者の情報を共有できるという。「疑義照会だけでなく、病院の薬局を通してすべての情報をやりとりするのがよいと思います」と大岩さんは示唆する。

現在、精神科の患者には一部の薬局薬剤師しか対応していないが、国の医療政策のもと地域で暮らす精神科の患者は増加している。これからは一般の薬局も対応していかなければ地域の薬局としての役割を果たせなくなるだろう。また、初期研修医をはじめ、プライマリケアを担う医師たちのトレーニングでは精神科の研修は必修となっている。こうした地域の流れに遅れを取らないように、大岩さんの活動を参考して精神科の患者のサポートにもぜひ取り組みたい。